

教育学研究科・グローバル教育展開オフィス

岡野 裕仁

国際学会：31th International Congress of Applied Psychology(ICAP2026)

参加地・期間：イタリア・フィレンツェ 2026年7月21日～25日

発表題目：Natural Language Processing of Personal Narratives Reveals
Cognitive and Behavioral Signatures of Self-compassion

成果の概要

【自身の発表について】

本研究は、自分自身に思いやりを向ける心理的態度であるセルフ・コンパッション(Neff, 2003; Gilbert et al., 2017)が、個人の自由記述にどのような言語的特徴として表れるかを、自然言語処理および深層学習を用いて検討したものである。従来の心理尺度による自己報告だけでは捉えにくい心理的特徴を、個人が日常的に用いる言葉から把握できる可能性を示すことを目的とした。

発表では、研究の背景、分析方法、予測精度、明らかになった認知的・行動的特徴、心理学研究や心理支援への応用可能性について説明した。限られた時間の中で、専門領域や文化的背景の異なる参加者にも意義が伝わるよう、分析手続きだけでなく、自由記述を心理学研究に用いる意義を明確に示すことを心がけた。英語で研究成果を発信し、その場で質問に回答した経験は、研究内容を簡潔かつ正確に伝える能力を高めるうえで有益であった。

【他の研究者との交流】

発表後には、自然言語処理による心理特性の推定、異なる文化や言語への結果の一般化、心理支援場面での活用可能性などについて質問や意見を受けた。これらのやり取りを通じて、本研究への関心を確認するとともに、今後検討すべき課題を具体化することができた。

学会では、セルフ・コンパッション、メンタライゼーション、ウェルビーイング、人工知能と人間関係など、自身の研究と関連する発表に参加した。特に、心理療法の知見を日常生活や社会的環境へ拡張する研究や、AI時代の孤立と人間同士のつながりを扱う議論から、多くの示唆を得た。自然言語処理を単なる予測技術としてではなく、人の苦しみや回復、他者との関係を理解する方法として位置づける重要性を再認識した。また、海外の研究者や学生と研究上の関心について意見を交換し、国や研究領域による問題意識や方法論の違いに触れることができた。

【会場の様子及び本支援を受けた感想】

会場では、応用心理学に関する多様な研究発表や討論が複数の会場で同時に行われ、世界各国から集まった研究者や学生が活発に交流していた。セッションの前後や休憩時間にも意見交換が行われており、研究成果を共有し、新たな研究上のつながりを形成する国際学会の意義を実感した。異なる専門的背景を持つ参加者から意見を受けることで、文化差の検討、機械学習モデルの解釈可能性、心理支援への応用に伴う倫理的配慮など、今後取り組むべき課題も認識できた。

本支援により、渡航費や参加費等の経済的負担が軽減され、研究発表と研究者との交流に集中することができた。海外で開催される国際学会への参加は大学院生にとって大きな負担を伴うため、このような支援は、研究成果を国際的に発信し、海外の研究者との人的ネットワークを形成する機会を得るうえで極めて重要であると感じた。貴重な機会を与えていただいたことに深く感謝いたします。

【今後の研究活動へのつながり】

今回得られた意見や知見を踏まえ、今後は自由記述からセルフ・コンパッションや心理的变化を捉える研究をさらに発展させたい。また、自然言語処理を用いて人の苦しみや回復、他者とのつながりを理解し、その成果を心理学的支援へ還元する研究へと展開していきたい。今回の国際学会参加は、現在の成果を国際的に発信するだけでなく、自身の研究を広い視点から捉え直し、今後の方向性を明確にする貴重な機会となった。